

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News



のちに野球小説家として人気を博す押川春浪は、1891(明治24)年、仙台の東北学院に入学。野球に熱中し、当時野郎だった宮城野原をグラウンドにして、毎日仲間たちとボールを追いかけ回していた。現在でも宮城野原は野球少年たちの聖地である。



押川春浪「詩集」(1914年 九十九書房)

宮城野原で野球三昧

文学のある風景

然し学校には野球をやる程のグラウンドが無いので、彼等は毎日毎日放課後、半早ほど離れて居る宮城野原へ出張して練習をやる。野次連中は御苦労にもゾロゾロ歩いて来る。何しろ少くとも野球を知って居るのは、其中の四五人で、大抵は初めてバットやボールを見たこと云ふ連中なので、所謂斯道の先輩たる僕や古村の苦心は一通りでなかつた。第一グラウンドは凸凹で、バウンドなどは何処へ飛べ分らぬ。且宮城野原は兵隊の練兵場なので、試合最中一大隊突貫し来つて、追散される事などは毎々ある。

(中略)グラウンドに着くと直ぐにネットを張る。ラインを引く、息を吐く暇もなく練習をして、日が暮れて球が見えなくなつてもなかなか止めぬ。雨が降つてもビシヨ濡れになつて、アウト、セーフと怒鳴つて居る。或時唯一本のバットが折れて仕舞つた際など、一同泣かんばかりの面付になつて、各自五銭か十銭かつづつ財布の底をばたいて贖金したが、当時仙台にバットを売る店などは一軒も無いので、其形状を描いて換物屋に造らせて居る間、手頃の杉の木を切つてバットの代用とし、一日も休まず練習を続けた事などもある。

(押川春浪「蛮勇豪語」)

小池 光の 気になる日本語

26

起承転結

起承転結という用語があるが、そもそもは漢詩の作法で、四行からなる詩の各行を「起」「承」「転」「結」となるように作れ、というほどの意味である。

漢詩にとどまらず、詩歌一般に通用する、はなはだ的確な作法とおもう。世に伝わる有名な詩歌にはこの起承転結をふまえたものが少なくない。

短歌の場合でも初句が「起」、二句から三句にかけて「承」、そして四句で「転」をかけ、結句が文字通り「結」となるように意識して作るとなかなかうまくゆく。もつともこの原則に合うものがすべてではないけれど、

以前にも紹介したが、読売新聞に「こどもの詩」という小さなコーナーがあって、幼稚園から中学生くらいまで、毎日一篇の投稿が載る。これがおもしろい。その中に典型的な起承転結詩があったので紹介しよう。作者は福岡県の幼稚園の年少組。四、五歳である。字をいまだ知らないで言ったことをママがそのまま記録して投稿した。

きょうね けいさつがきたよ
みぎみてひだりみて
みぎみてひだりみて

わたるんだって
いのちはね
いっこしかないらしいよ
だからみぎみてひだりみて
みぎみてひだりみるんだよ

一読、爆笑だ。幼稚園に警察官が来て、交通安全教室を開いた。積り歩道の渡り方をせつめいした。こどもはそれを聞いて、びっくりするところがあったのだろうか。

第一行が「起」。いきなり「けいさつがきたよ」と、何事かと思わせる。詩歌のはじまりはこうでなくてはならない。ぐいと読者を引き寄せ、次の三行が「承」で、これもとてもおもしろいが、「いのちはね/いっこしかないらしいよ」という「転」がすばらしい。いのちをひとつ、ふたつでなく、いっこ、にこくと数える。まさにこれぞこどもの世界で、われわれには及びもつかないことである。

「ないらしいよ」という推量形(?)もいい。こどもは、きょうねはじめて「いのち」というものを知ったのであった。そして、最後の二行の「結」部、冒頭の「だから」がとてもよく生きている。

たまたま今日の出来事をママに報告して、無意識のうちに偶然できてしまった起承転結のみごとき。ちよつとした奇跡だ。

学芸家日記

○2019年4月17日(水)

開館20周年記念特別展「井上ひさしの劇列車」のオープンを10日後に控え、展示室の準備が始まりました。井上の評伝劇をテーマにした今回の展示では、芝居の世界に入り込んだような展示室にしたいと、舞台美術家の方にデザインを依頼。いつもとは一味違うユニークな空間が出現しました。展示を見逃してしまった方、ご安心を。12月から「井上ひさしの劇列車」第2弾を開催します。ぜひご覧ください!



○2019年7月28日(日)

夏休み恒例の「こども文学館えほんのひろば」、絵本作家のスズキコージさんによるワークショップを開催しました。思い思いのお面やかぶりものを作り、それを身にまけて文学館の敷地を行進。シンバルや太鼓、笛の音が鳴りひびく、にぎやかなパレードになりました。最後はコージさんが紙吹雪を撒きながら「仙台の子どもたち万歳!」。参加した親子のみなさん、夏休みの素敵な思い出になったでしょうか?



○2019年7月5日(金)

当館「友の会」でも20周年特別企画として、小池館長同行の文学散歩を実施しました。行き先は山形・上山の斎藤茂吉記念館。車中では小池館長が茂吉のお話を、茂吉記念館では秋葉四郎館長がギャラリートークをしてくださるという貴重な企画。参加者からは「茂吉が身近になった」「作品を改めて読んでみたい」との声が聞かれ、充実の日となりました。



『胎児のはなし』

女が一冊に残る本を、という依頼ですが、一冊となると、それを送るだけでも自分の中でいろいろ紛糾し、果てしない論争まで巻き起こるので、最近読んで本で一番記憶に残ったものを選びました。

「あるのか」という興味で読みます。「おもしろそう」という欲求で本を読むことはあまりなくなつたので、「完全犯罪」とか「最後の一行まで」とか「涙がとまらない」などと言う本は、まづ読みません。若い頃はひととおり、純文学や海外のSFも読みましたが、最近では小説やフィ

クションの類いはほとんど買わない。なんというか、本を読むことにおいて「おもしろい」というのが邪魔になることもありま

たのですが、聞く最相葉月氏と、答える産婦人科医の増崎英明氏の話があまりにもおもしろい。あまりおもしろいので、途中で読むのをやめようかと思つたのですが、結局、最後まで読んでしまいました。

倒的な影響を与えないはずがない。そこまでの生理的、肉体的、かつ劇的な体験など、男にはありえないわけで、そんな勝手な妊娠出産願望を、かかりつけの産科技術士、2歳児の母に打ち明けたり、言下に「すんごい精



クモラスなエピソードとか持ち出されると、ちょっとうんざりする。誤解されるのを覚悟で言えば、おもしろいというのには、どこかで人の心を弄びます。私が描いているのは漫画なので尚更です。讀んだ人から一感動しました」などと言われると、少し後ろめたい気持ちになるのは、いずれ身に覚えがあるからでしょう。

今回選んだ『胎児のはなし』という本はどうかというと、この本は誠実です。胎児という存在に興味があつて読みはじめ

「胎児のはなし」には、いろいろと驚くべきことが書いてあります。本を讀んでいてこんなに驚いたのはひさしぶりです。妊娠と出産はあくまで母親のものであつて、男なんて傍でハラハラしながら見守る脇役ではないかと思つていたのですが、実は、夫婦は妊娠中の胎児のへその緒や胎盤を介して、血が繋がつて行くそうです。これには驚愕しました。子どもたちが、夫婦なんてどこまで行っても家の他人だと思つていたら、それが常識だったのに、胎児を介して父親のDNAが母親の中にも入って行くとは。これは、赤の他人だったものが、妊娠出産を経ることによって、血縁関係になるということです。こん

なことがありうると思つてもいませんでした。

が、だいぶ払拭されるだろうし、それにとまらず、結婚どころか、恋愛というものにも、新しい価値観が生まれそうです。さらに大げさに言えば、進化論にさへも今までなかった解釈が迫られるかもしれない。

科学読み物によくある未確認情報じゃないかと疑う人もいるかもしれませんが、増崎先生、その道の第一人者なのに、自分で調べて、自分で書いています。ましてやその話を聞いている最相氏は、驚愕を辿り越して感動してしまつている。私にいたっては、感動を通り越して、呆然としてしまいました。

私にも子どもが一人います。新生児室の前ではじめて対面した時、私の腰の辺りになにか南



と世間に公表し、認知されるべき事柄です。そうすれば、妊娠と出産を前にして、男親が抱えている部外者感のようなもの

が、だいたい払拭されるだろうし、それにとまらず、結婚どころか、恋愛というものにも、新しい価値観が生まれそうです。さらに大げさに言えば、進化論にさへも今までなかった解釈が迫られるかもしれない。

繋がった衝撃だったのか、などと言ふと、この本にもちよつと出て来る、DNA二重螺旋構造を発見したジェームズ・ワトソンに殴られるかもしれない。出産を経た夫婦は、歳をとった夫婦は、歳をとつ

た兄妹のように見える時があります。それを考えると、この世界において、胎児というものがどんな存在なのか、深淵に沈んで、驚愕すべき真理を、我々はまだ全然わかっていないのかもしれない。

いがらしみきお 漫画家。1955年、宮城県加美町生まれ。1979年、24歳でデビューし、『ネコトピア』により若者を中心に圧倒的支持を得る。1983年、『あんたが悪い』で日本漫画家協会優秀賞を受賞。休筆のち1986年に発表された『ぼのぼの』が大ヒットし、1988年、講談社漫画賞を受賞。映画化、TVアニメ化される。1998年には『忍ペンまん丸』で小学館漫画賞を受賞。2009年には宮城県芸術賞を受賞。2015年、『年の木』で文化庁メディア芸術祭漫画部門優秀賞。2016年には『誰でもないところからの眺め』で日本漫画家協会優秀賞を受賞。『SINK』『かむらば村へ』『川』など多くの話題作を発表。仙台市在住。



いがらしみきお先生 来館の記



職員の間で常設展示を見学するいがらしみきお先生 (左から2人目)

次のページで詳しくご紹介していますが、2019年4月27日、仙台文学館の常設展示がリニューアルオープンしました。その2日前、4月25日のこと。常設展示の新コーナー「漫画の哲人 いがらしみきおの世界」をご覧になるため、いがらしみきお先生とスタッフの方々が来館されました。

リニューアルの目玉のひとつであるこのコーナーでは、いがらし先生の原画や素材を展示しているほか、仕事場の写真を背景に、いがらし先生や「ぼのぼの」たちと一緒に写真を撮ることができるフォトスポットも新設。従来の常設展示とはひとおび違う、楽しいスペースが出現しました。

さっそく、いがらし先生は展示を熱心に見学。そのあと、みずから筆をとり、展示品(ぼのぼのの神社)のキャプションを作ってくださいというサプライズも。なんという贅沢! なにより、いがらし先生に展示を楽しんでいただけ、担当職員も感激でした。

「哲学的」とも評される、独特な魅力を放ついがらしみきおの世界。みなさまも当館の常設展示にお出かけいただき、いがらしワールドをじっくり堪能ください!



いがらし先生がふたり? 「いがらしみきお先生と一緒に写真を撮ろう」のコーナー。あなたも写真を撮って、SNSにアップしてみてください!



ケースの中には貴重な原画も展示されています

「ぼのぼのの神社」のキャプションを書いたいがらし先生

最相葉月氏と増崎英明 胎児のはなし (2019年 ミラクル)

4 ギャグからホラーまで多彩に描きこなす 漫画の哲人・いがらしみきお

新コーナー

5 撮影OK! SNS映えスポット

独特のゆるい雰囲気と、哲学を感じるセリフで人気を博す、青いラッコが主人公のギャグ漫画『ぼのぼの』。作者である宮城県出身の漫画家・いがらしみきおを特集したコーナーが新登場！ 代表作『ぼのぼの』『3歳児くん』『sink』、幻の未発表作品『グール』、自身と仙台の関係語るエッセイ『うろおぼえ仙台』などを展示し、ファンのみならず必見の場所となっています。もちろん、初めていがらし作品に出会う方でも楽しめる内容です！



このたび写真撮影のためのスポットを設置いたしました！『ぼのぼの』やアライダマくんを抱きしめて、いがらしさんのパネルと並んでパシャリ。撮影コーナーで写真を撮ったら、ぜひSNSに投稿してくださいね。その時は、「#ぼのぼの #いがらしみきお #仙台文学館」をお忘れなく！



6 どんどこ、 どんどこ。 とよたかずひこの 絵本世界

新コーナー

みやぎの児童文学のコーナーに新しく追加された、鮮やかなピンク色が目をひく展示。

「ももんちゃん」シリーズで知られる、仙台出身の絵本作家・とよたかずひこの特集です。絵本の世界とその制作過程を同時にのぞけるような、わくわくする展示になっています！

注目はとよたさんの小学生の頃の絵。現在のかわいらしい絵とは違うリアルなタッチで相撲の一番や映画のワンシーンが描かれ、画力の片鱗が垣間見えます。

〈常設展観覧料〉※特別展観覧料は別に定めます。

	個人	団体(30名以上)
一般	460円	360円
高校生	230円	180円
小・中学生	110円	90円

いかがでしたか？
続きはぜひ展示室で！
みなさまのご来館をお待ちしています！

1 より見やすく、 居心地のよい 展示空間に

展示室全体をあたたかい色の照明で包み、展示資料はより見やすく、そしてつい長居したくなる場所に、和紙のトンネルをくぐると、館長・小池光の短歌を投影した映像がみなさまをお出迎えます。展示室内にも、小池館長の代表歌をダイナミックに並べ、ことばの世界へご案内します。



2 作家・文学を より身近に 青春と文学の街・仙台

新コーナー

北杜夫、向田邦子、小池真理子、熊谷達也、佐伯一麦、恩田陸、伊坂幸太郎、etc... 仙台で青春時代を過ごし、文学の世界へ羽ばたいた作家は数多くいます。創作ノートや直筆原稿、ゲラ劇(本になる直前の段階)といった作品に直接関係するものほか、眼鏡や鉛筆、愛用のギター(1)などを展示し、作家をより身近に感じていただけるような内容になっています。仙台ゆかりの作家の新刊を座って読めるコーナーもあるので、つい読みふけてしまいそうです。



3 あの日と、文学。 震災と表現

新コーナー

2011年3月11日の東日本大震災は、多くの人にとって大きなできごととなりました。それは文学の世界も例外ではありません。文学者たちは、俳句や短歌、川柳、小説、随筆と、それぞれ形で震災を表現しています。このコーナーでは、「震災詠」をはじめとするさまざまな文学作品を、震災をテーマにした写真やアート作品とともに紹介しています。現実に対して、ことばが果たせる役割を考える場となれば幸いです。



常設展示リニューアル 新しくなった 見どころも選

仙台文学館はおかげさまで開館20周年を迎え、2019年4月27日に、常設展示をリニューアルオープンいたしました！
そこで今回は、その見どころを一挙にご紹介いたします。
(これまでのコーナー「本の巨樹」井上ひさし「仙台文学の源流」も引き続きご覧いただけます。)

特別展

「斎藤茂吉—そのひとすぢの道」

かがやけるひとすぢの道透けくつかうかうと風は吹きゆきにけり
 (あらたま)

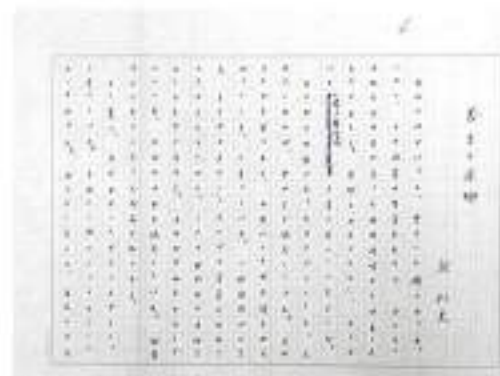
二〇一九年の秋は、山形県上山出身の歌人、斎藤茂吉の特別展を開催します。
 歌人である当館館長の小池光が茂吉短歌の魅力をお伝えするほか、茂吉の次男であり仙台北杜夫の作家・北杜夫ら、茂吉をめぐる個性豊かな人びとについても展示。近代短歌を代表する歌人の生涯と作品を、多くの貴重な資料で紹介いたします。



1941(昭和16)年5月、高王峰・霞山での斎藤茂吉。茂吉の甥・高橋重男による撮影。写真提供：斎藤茂吉記念館



茂吉愛用のカンカン帽と眼鏡 (斎藤茂吉記念館蔵)



北杜夫原稿「茂吉と食物」
 茂吉の次男で作家の北杜夫は、大学時代を仙台で過ごしました。

斎藤茂吉 書
 「かざるひのゆふさり来れど暮の水隠れみづなればゆふ元なしや」
 (「赤光」より)

展示関連イベント ※会場はすべて仙台文学館講習室

①講演会「斎藤茂吉のおもしろさ」

日時：9月16日(月・祝) 13:00～14:30

講師：水田和宏氏(歌人・京都産業大学教授・京都大学名誉教授)

定員：100名(抽選)

※申し込み受付は8月31日(土)で終了しました。

②対談「茂吉短歌を語る」

日時：9月28日(土) 13:30～15:00

出演：花山多佳子氏(歌人)、小池光(歌人・仙台文学館館長)

定員：100名(抽選)

申込締切：9月12日(木) 必着

③講演会「どكتورマンボウ家のでんやわんや」

日時：10月14日(月・祝) 13:00～14:30

講師：斎藤由香氏(北杜夫氏長女・エッセイスト)

定員：100名(抽選)

申込締切：9月28日(土) 必着

【イベントの申込方法】

往復はがきに、イベント名・氏名・電話番号を明記して、各締切日までに仙台文学館へ。申し込み多数の場合は抽選。はがき1枚につき1名、1イベントの申し込み。いずれも入場の際、特別展観覧券の半券が必要です。
 ※いただいた個人情報上記イベントのご連絡以外に使用しません。

○学芸員による展示解説

日時：10月6日(日)、11月4日(月・振休) 各日11:00～12:00

申し込み不要、直接会場へ ※当日の特別観覧券が必要です。

会期：2019年9月14日(土)～11月24日(日)

※会期中、一部展示替えを行います。前期9月14日(土)～10月22日(火) 後期10月25日(金)～11月24日(日)

休館日：月曜日(9月16日・23日、10月14日、11月4日は開館)、祝・休日の翌日(10月15日、11月24日は開館)、第4木曜日
 観覧料：一般800円、高校生460円、小・中学生230円(各種割引あり)

まちをめぐって 本をめぐって



本紙をご覧いただいているみなさんは、おそらく本が好きな方々ではないでしょうか。その、みなさんが大好きな「本」にまつわる話題を、街に飛び出してあつめてみました。



「古本あらえみし」



ながら「荒瀬美」の千賀由香さん、土方正志さん、スタッフの秋山にさん

古本あらえみし
 仙台市宮城野区榴岡4-7-12 TEL 022-298-8455
 平日12:00～20:00、土・日・祝12:00～19:00(水曜定休)



「田」のメンバーの詩人・武田こうじさんと「本があるから」の仙台の書店家、故・池田信也さんの特集も必読です。

「本があるから Book! Book! Sendai → Book! Book! Miyagi 2008-2018」価格1,000円(税別)。
 book cafe 火曜の昼などで販売中。
 詳しくはBook! Book! Sendaiのウェブサイト
 (http://bookbooksendai.com/)をご覧ください。



店主の増田家次子さん



なつかしきを感じる店構え、以前の形跡の痕跡はわざとそのままです。

こどものほんのみせ ポラン
 仙台市宮城野区栗山1-24-37(井上商店1階)
 TEL 022-352-5605 10:00～17:00(水曜定休)

古本あらえみし

今年4月、仙台駅東口近くにオープンした「古本あらえみし」。店内には、写真集や探偵小説、地方の小出版社の刊行物など、通好みの本がぎっしり。なかでも注目は、東北ゆかりの作者が五十音順に並んだコーナー。「石川啄木の隣が井上ひさし、その次に石原莞爾なんて、おもしろいよね」と、店主の土方正志さんは笑います。土方さんは出版社「荒瀬美」の代表。店内の本たちは元をたどれば土方さんの仕事の資料であり、趣味で集めた蔵書。その保管場所だった実家の整理をきっかけに古本屋開業を思いついたそうです。

2008年、「街を歩いて本と出会う」を営業に、本好きのメンバーが集まって活動を始めた「Book! Book! Sendai」(以下、「田」)。今年、その10周年記念誌「本があるから」が発行されました。東日本大震災後、県内各地に増えてきたブックカフェや古本屋などを取材した記事や、仙台の書店の「盛衰記」など、充実の誌面です。

「本があるから」

30年以上仙台朝市の近くで親しまれてきた「こどものほんのみせポラン」が、今年5月に東仙台に移転し再オープンしました。以前は小さな小さなお店でしたが、今度は「10人入ってもゆうゆう」と、店主の増田家次子さんが顔をほころばせます。

こどものほんのみせポラン